

夏の海沢大滝



三釜の滝

木版画
安藤修二

～ 季節 だより ～

まぼろしの滝

今回は、夏にふさわしく滝の話題を、森林とからめてお届けしましょう。

多摩川を遡り、奥多摩湖を過ぎると山梨県の丹波山村に入ります。村落を越えてさらに進むと、国道の上の急峻な斜面にツガを中心としたうっそうとした天然林が広がってきます。

その素晴らしい天然林を舞台に、ある条件が整った時にだけ現れる滝があります。その条件とは雨です。雨が降っている時とその直後にだけ滝が現れるのです。私は、それを「まぼろしの滝」と呼んでいます。

乾季と雨季とに分かれる砂漠地帯では、雨季にだけ川が現れるという現象が生じますが、砂漠とは対極にあるうっそうとした森林を舞台に、砂漠と同じ現象が生じるのです。

一般的には、上流域に森林が広がっていれば、そこから流れ出る河川は、雨が30日ぐらい降らなくても、干上がることはまずありません。

これは、森林地帯に降った雨が、森林土壤に染

み込み、それが少しずつ河川に流れ出ることにより濁水を緩和しているからです。洪水の緩和と併せたこの森林の働きを「森林の水源涵養機能（緑のダム）」と呼び、その機能のほとんどは森林土壤が果たしています。

では、まぼろしの滝が見られる森林には、水源涵養機能の高い土壤は発達していないのでしょうか。いえ、そうではありません。森林の木々から供給される落葉などで空隙の多い土壤は、十分に発達しています。しかし、岩が露出するような急峻な土地ゆえに、森林土壤と呼ばれるものが圧倒的に薄いのです。

ですから、ちょっと日照りが続くと搾り出す水が無くなり、流れは涸れてしまいます。また、少しまとまった雨が降れば土壤は飽和状態となり、雨水は地表を流れ落ち、谷に流れを作るのです。そして、その時にだけ滝が現れるのです。

この夏も奥多摩を訪れ、滝からはマイナスイオンを、そして、森からはフィトンチッドを浴び、心身をリフレッシュしてください。

(堀越弘司)

～ 赤 っ せ 尾 ～

大ダブから雲取山へ

雲取山(2017m)は一度は登ってみたい山として、多くの登山者が憧れる山です。登山口は、三条の湯、鴨沢、そして秩父の三峰からが一般的で、登山者の多くがこの三つのルートに登っています。

今回は、日原鍾乳洞バス停から日原林道に入り、大雲取谷に沿った大ダブ林道を登り、翌日は雲取山山頂から小雲取山を通り富田新道を下り日原林道へ戻るルートを紹介します。

日原林道は、カツラ、トチノキなど巨木が多く見られ、特にトチノキは、季節がら数多くの立派な花をつけていて素晴らしいです。

大ダブ林道は、沢の爽やかな音を聞きながら登山道を歩きます。新緑の頃には、クワガタソウ、サワハコベなどかわいい花が沢山咲き、また野鳥のさえずり、エゾハルゼミの声が心地良く爽やかな気分になります。

見事なイチイの木に会えたら、すぐに三峰からの縦

走路と合流し、そこが大ダブです。閉鎖された雲取ヒュッテの前からは、両神山、和名倉山の展望が素晴らしい、ここから雲取山荘はもうすぐ。ログハウス調のおしゃれな山荘は登山者に人気で、一度は泊まってみたい山荘です。

翌日は山頂へ。ここからは富士山をはじめ秩父の峰々、大菩薩嶺、南アルプス、丹沢など展望が素晴らしいです。小雲取山から富田新道へ入ると、一面の笹の中に立つカラマツ林が素晴らしい、少し下ると今度は美しいブナ林となります。唐松谷橋を渡り日原林道に戻ります。どこも深緑が眩しいばかりで、疲れを吹き飛ばしてくれます。

このルートは入山者が少なく、静かな山歩きが楽しめますが、やはり山歩きに慣れてからが良いでしょう。

奥多摩の山々を是非楽しんでください。

(沖倉 慶子)

～ 行 っ て ま た お よ ～

海沢の三滝探勝

海沢谷は大岳山北面を水源に急峻を落ちて北流し多摩川に注ぎます。複雑な地形、地層が絡み合い随所に奇瀑を懸けます。海沢谷ではこれらの滝が僅かな地域に集中して見られます。

林道を発電所、おさかなセンター(元水産試験場)と進み、瀬見橋での休憩のあと最初に出会うのが出石窪の滝です。見上げる岩間から静かに流れ落ちます。坂本橋を右岸に渡ると対岸には小さな山葵田が点在します。2つの大きな滝を持つ天地沢との出会いを左岸に過ぎると山際に崖上から姫松の滝が懸かります。

左岸に激しく飛沫を上げるのは天狗岩の瀑流帯です。巨大なチョックストーンを持つ直瀑に始まり、右曲して段滝、最後に岩盤を落ちて本谷との出会いを作る井戸沢の滝群です。

三ツ釜の滝は階段を上がり側面から見るのが良いでしょう。隆起した脈理上の地層と、侵食され丸く深くえぐられた3つの釜が足下に見られます。吸い込まれるような雰囲気を持った滝です。釜の形、神秘的な色合いと共に奥多摩屈指の名瀑です。

谷からの涼風と瀑音に導かれ下降路を辿ると大滝です。滝頭から6mに棚を作り、溝状の岩肌を滑り、最

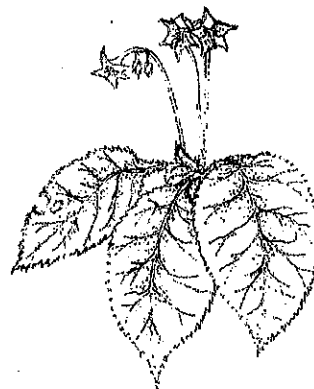
下部の扇状岩床に飛沫を上げます。20mの落差をもって見る者を圧する豪快な滝です。

来た道を戻り途中から沢身に下りて左岸を行くとネジシの滝です。上段は北向きに落ち、下段でスパイラル気味に左岸の壁をえぐります。黒い岩肌は滝を囲みくり抜いた様に侵食され、薄暗く不気味な感じの滝です。

探勝路は溪畔を10分ほど園地に戻ります。帰路は大樽峠を左折し鳩ノ巣駅へと向います。道端に道祖神を過ぎると杉林の中に苔むした石垣を散見します。“タク婆”民話を残す越沢の廃村跡です。樹齢40数年の杉林に残る石垣に人々が山と共に生きた証をみる思いです。

松の木峠を左に折れると鳩ノ巣駅までは10分ほどの道のりです。

(磯田 益男)



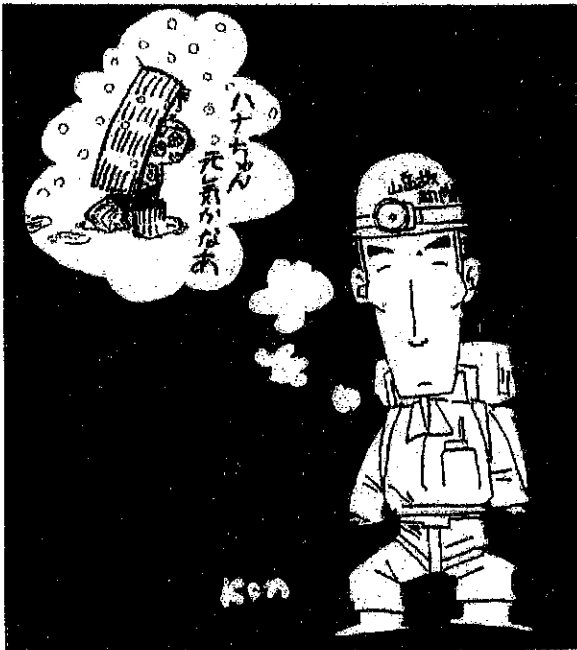
イワタロ

滝の周辺など、湿った岩壁に生える植物です。

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その12 ～

「今年初めての山岳遭難」

今年3月31日、私は警視庁を定年退職した。昭和41年山形県の県立高校を卒業し、当時中野にあった警察学校の門をくぐって43年余、感慨深いものがある。古い歌だが、海援隊の歌に「思えば遠くへ来たもんだ」というのがあったが、43年の年月を顧みると、まさに思えば遠くへ来たもんだの感がある。しかし最後の20年は青梅警察署に勤務し、山岳遭難者の救助に従事できたことは、私にとって幸せであった。



～思えば、遠くへ来たもんだ～

高校の頃、故郷の飯豊連峰や朝日連峰に登り山の魅力に取りつかれ、警視庁に入ってから山岳会を作ったり、機動隊では機動救助隊やレンジャー部隊に所属し、五日市警察署や青梅警察署と山に関係ある所轄を渡り歩き、山岳救助隊員として活動してきた。レスキューと山にこだわり続けた警察人生であった。

本来なら満60歳の昨年3月が定年であったのだが、後輩の育成ということでそのままの身分で1年間だけ定年を延長して頂いた。そして今年の3月を迎え43年の警察人生を終えたのである。

昭和34年、国民体育大会が東京都で開催され、その山岳競技の会場が奥多摩の山であった。その際競技中の山岳事故に備え、奥多摩を管轄する青

梅警察署に山岳救助隊が創設され、今年で50年という節目の年でもある。そんな記念すべき年に、私がライフワークとしてきた山岳救助隊を卒業できるというのも幸運であった。

4月1日から私は、嘱託職員という身分で奥多摩交番に詰め、奥多摩を訪れる登山者に対し山岳情報を提供したり登山相談に応じたり、若い山岳救助隊員に対し救助技術の助言、指導をしたりする、山岳指導員という職種を新たに設けて頂き、月に16日間勤務することとなった。

勝手知った大好きな奥多摩の山である。もう警察官ではないが、山岳遭難の防止にまだ役立つことができるのであれば、初心に帰って誠心誠意、山岳救助隊のお手伝いをしていきたいと思う。

昨年の暮れから、山岳遭難事故の発生が止まった。今年1月から4月の中頃まで山岳救助隊としての出勤は、山岳地帯における変死体の収容や捜索など、10数件の出勤はあったが、登山者の山岳事故として計上した事案は1件も発生していないのだ。

例年ならずすでに10件前後の事故が発生し、何名かの死亡者も出ている頃である。私が山岳救助隊員になってからは初めての経験である。4月になって木々が芽吹き、新緑に染まった山々に、休日ともなれば中高年の登山者が大挙して訪れるようになった。事故のないことはいいことだ。このままゴールデンウイークを乗り切りたいと考えていた。

4月12日、13日と私は連休であった。12日の夜、森救助隊長から電話が入った。昨日11日に御岳山へ単独で登った都内在住のWさん男性(58歳)が帰らず、家人がどうしようか迷っていたところ、今日の午後1時40分ころ、妻の携帯電話に「滑落し、骨折して動けない、助けて、電波が届かない」とのメールが届いたため、地元S警察署に捜索願が出された。S署からの連絡で、森救助隊長以下5名が出動。ケーブルカーで御岳山に登り青梅消防署の山岳救助隊と合同で捜索した。転落事故の多い天狗岩、七代ノ滝付近の岩場、奥の院付近の岩場などを探したが発見できず、日没となり午後7時に一旦捜索を打ち切り、明日は、午前8時から再捜索の予定だという。私も明日の週休は取り止めて捜索に出動する旨を伝えて電

話を切った。

翌 13 日、私は午前 7 時ころ奥多摩交番に出勤した。山岳救助服に着替え、出勤の準備をしているとき、昨日捜索に入った佐藤隊員が到着し、昨日の捜索範囲を説明してくれた。その後にはわかった情報は、昨日午後 3 時 45 分ころ携帯電話からの 119 番通報で、「私は W と言います。御岳山に登り、けもの道を行って掴まっていた枝が折れ 4 メートルほど転落し足首を骨折しました。ヘリの音は聞こえるが見えない。七代ノ滝に行って、別の道を通って、汚い展望台に行き、けもの道に入った所です。御岳山のケーブルが右手に見えます」と消防庁の通信司令室と通話していたことがわかった。しかしそれ以来再び携帯電話が不通となってしまったという。「それじゃ高岩山じゃないか」と私が言うと、「そうですよねえ」と佐藤隊員も応じた。上高岩山には展望台が設置されていた。高岩山はその奥である。あの辺りだと登山者も多くはない。

森救助隊長以下 10 名で、午前 8 時のケーブルカーで御岳山に登った。後で鑑識課員 4 名が警察犬 2 頭を連れて参加するという。御岳山集落の消防団詰所に集合した。

今日捜索に加わる青梅消防署の山岳救助隊と御岳山消防団も集まり、今日の捜索範囲を検討した。

警察は高岩山 1 本で行くことを伝えた。青梅消防は芥場峠から鍋割山を探すという。そして消防団は大楯峠から鳩ノ巣、大塚山から古里の 2 本を探すことにしてそれぞれに散った。

ロックガーデン（岩石園）から上高岩山方向の登山道に入る。3 個班に分かれ、けもの道や仕事道などを探しながら登っていく。40 分ほど登ると上高岩山の展望台に着く。W さんはここまでは来ている。ここから先のどこかで落ちたのだ。展望台から高岩山に続くサルギ尾根に入る。

途中尾根は左に分かれて下る方が高岩山に行く主尾根なのだが、真っ直ぐのびている支尾根の方にも踏み跡がある。2 班がそちらの方に入り探している。私の班はサルギ尾根を高岩山に向う。

分岐からしばらく行くと、沢を挟んだ支尾根に入った 2 班が、何事か大声で叫び合っているのが聞こえる。無線を持っている新人の禰寝（ねしめ）隊員に確認させると、主尾根と支尾根の間にある沢の下の方から、遭難者と思われる声が聞こえるというものであった。「よしやったぞ」私と禰寝

隊員は急いで右下の急な沢に踏み込んでいった。

2 班の佐藤隊員と藤田隊員は遭難者と接触したらしい。遭難者は左足首を骨折して自力歩行は不可能であり、佐藤隊員が高岩山側に背負い上げるという。

遭難者の現在地が分からず、高岩山の下あたりというので、私と禰寝隊員は再度尾根上に登り返し高岩山方向に急いだ。途中右側の沢から声が聞こえるので、支尾根を下る。150 メートルほど下り、背負って登ってきた 2 班と接触できた。50 メートルほど背負い上げたというが、できればここからヘリでピックアップしたい。

警視庁航空隊の救助ヘリ「おおとり 2 号」が立川を飛び立ち救助に向っていると無線で流れた。15 分ほどで到着するだろう。空を覆っている立木を何本か倒せばこの場所からでも吊り上げ可能と思われる。鋸で最小限の立木を伐採した。しばらくしてヘリの音が聞こえてきた。発炎筒を焚き現在地に誘導する。低く侵入して来て航空隊員がホイストで降下を試みるが、風圧の中、立木の枝がじゃまになり降下することができない。航空隊員の降下はあきらめ、ホイストのみが下ろされた。遭難者はレスキューキャリングラックのままホイストにセットされ、佐藤隊員が補助で付き添いピックアップされた。

午前 10 時 45 分ヘリに収容され立川の災害医療センターに搬送された。早めに発見できてよかった。「展望台」という情報があったことで遭難場所が絞れた。今年になって 1 発目の山岳遭難が、いい展開で救助することができた。

W さんが左足を骨折して 3 日目、部分的に壊死が始まっており、発見がこれ以上遅ければ左足切断の事態となったかもしれないという。2 晩のピバークも比較的暖かい夜だったことが幸いした。ただ人間は極限状態に追い込まれると幻聴、幻覚に悩まされる。今回の W さんも佐藤隊員が接触したとき、靴を片方しか履いていなかった。佐藤隊員が「靴はどうしました」と聞くと「昨夜消防の人が大勢登ってきて、一緒に訓練をしたときに片方をなくした」と真剣な顔で答えたという。危ない、危ない。

（青梅警察署嘱託員 山岳指導員 釜 邦夫）

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(14)

『春の小川は、さらさらいくよ』という童謡でも知られる小川は、林や畑地の横を流れる小さな流れのことを思い浮かべますが、大字日原の小字「小川」は、大川(日原川)に対する支流の小川谷のことを指し、日原鍾乳洞付近から奥へ広がる地域一帯の地名です。

日原鍾乳洞は、古くは、一石山御岩屋(一石山大権現)といわれ、大日如来を崇めるための場所で、修験者や大勢の参詣者(道者)たちが参拝に訪れました。又、洞の下を流れる小川谷を大日谷と呼び、この付近一帯は、修験者や参詣者たちの聖地でした。

北関東方面から富士浅間を目指す修験者や参詣者たちの多くは、仙元峠から一杯水を経てヨコスズ尾根を下り、日原集落にある社家の右京家、淡路家に草鞋をぬぎ、一石山の御岩屋に参詣し、そこから小河内を経て富士詣でをすることがコースになっていたといえます(途中、倉沢分岐で別れる道者もいました)。仙元峠は、富士浅間参詣のお旅所といわれ、「浅間を選擇する峠」が語源といわれます。

一石山の御岩屋は、「本宮」「新宮」「仁王」「愛染」「胎内」「地獄」の6つの岩屋(洞穴)があり、現在

の日原鍾乳洞は、新宮の岩屋のことで、その上方の岩壁にあった他の岩屋は、現在閉鎖されています。

本宮の岩屋は、一石山の御本体として洞穴そのものが権現の伽藍で、鍾乳石は曼荼羅華、石筍は如来、菩薩、宝樹と目されていましたので、入洞することを参詣といい、修行(勤行)することを禅定と呼んでいました。

道者は、洞内に入ると、修験姿の先達がかざす松明の灯りを頼りに銭貨をまきながら進みました。洞奥には、胎蔵界大日如来像が水中に安置され、衆生の苦難を救ってくださるとして尊崇されました。

江戸時代の初め頃、一石山は、上野の東叡山寛永寺の支配下にあり、御座主の輪王寺宮一品法親王が京都から帯同した御用掛りの御簪師が一石山付近のミズキを原料として簪を製造して親王の御用に当てられたことから、日原の住民たちは、思いがけない産業振興(特産品製造)の恩恵に浴しました。白簪を村の産業として製造することになり、やがて幕府、武家、一般町人に広く使われるようになり、後に、柳簪と改名しましたが、日原村は、簪割(はしかき)村といわれるほど、盛んに簪作りが行われました。

【資料】奥多摩町誌、日原風土記、広報おくたま
(岡部義重)

奥多摩歳時記

夏の野山の野鳥

賑やかだった奥多摩の山々も、わきかえるような若葉や花のおまつりが終り、しっとりとした、深い緑に覆われてきました。いよいよ、梅雨から夏本番への季節がやってきます。しかし、鳥たちには、大事な繁殖の時期でもあります。東南アジア方面からはるばる繁殖のために日本列島にやって来た夏鳥たちを、あたたかく見守ってあげましょう。

頭から背中に光沢のある、瑠璃色をしたオオルリ(雄)や、コルリ、喉から胸が橙色で、腹は黄色で上面は黒色の、ダンディーな鳥、のキビタキ(雄)、そして、スズメ大のウグイスの仲間のセンダイムシクイが、「チョチョビー」とさえずっています。また、スズメほどの大きさで、雄の背面が青いツグミの仲間のルリビタキや、ウグイス、スズメよりやや小さいホオジロの仲間のアオシヤクロジ、ホオジロ、ウソなど里にくらしていた鳥たちも、繁殖のため奥多摩の地へやって来ます。運がよければ、托卵鳥のツツドリがボボ、ボボボボと竹筒を叩くような声で囀

き、ホトトギスが真っ赤な口をあけて、特許許可局、テッペンカケタカ、と血を吐くように囀く声などが聞こえるでしょう。そして、閑かな奥多摩の森の中で、大型のキツツキのアオゲラや、アカゲラが、繁殖行動の一環としてのドラミングを聞かせてくれるでしょう。

このように、奥多摩は、東南アジア方面からやって来た夏鳥や、留鳥のヒヨドリ、キジ、ヤマドリ、スズメなどと、漂鳥のルリビタキなどで一挙に賑やかになって来ます。

さあ、奥多摩へバードウォッチングに出かけましょう。たまに、上空を見上げることも忘れずに。運が良ければ猛禽類のサシバやオオタカの飛翔が見られるかも。おすすめの場所は、森林セラピーロードでもある、奥多摩むかし道や、奥多摩湖右岸のいいの道などです。針葉樹や広葉樹が混在しており、昆虫なども多く、鳥たちの繁殖に適しているからです。

(畑 幸夫)

ガイドだより ~病んで気付いた萌えの風~

5月中旬、日原鍾乳洞からの小川谷林道で名人達人によって「そば、山菜天ぷら山行」が企画された。

それでも高度をちょっと上げれば、若草色と新芽やわらかな空気感は、目に良し、肌によし、呼吸にやさしい。落葉樹の多い山域でもある。

自然に飢えた仲間よ、今日は同士ばかり 30 人を相手に会話がはずむ。

良く言うよ、と言いながら我も言う良き仲間。「古希か、仏か、仙人か」役者揃いでやっぱりにぎやかなもの。

腹をへらしたその先は、溪流の冷水で冷やした名人の打った、そばとうどんが待っている。楽しみ…。

林道脇広場に陣取り、打ちたて、ゆでたて、冷やしたての、そばとうどんが大きなザルに盛られて、車座の仲間には運ばれる。喉越し良く、アツと言う間に消え去る。この出来やっぱり職人でした！

過去にも、雲取で楽しんだ「名人の役者芸御開帳」で投げ銭にわいた先輩は、私が手術入院中一足先に三ツ又の合流を鹿と共に向こう岸に渡り、手招きで呼んでいたのは2年前。名人芸役者の御同輩も同じ病の招待状で、肺癌になった。私は、ひらがなの「がん」一歩手前で右半分を切り除きベッドの子守中、今日の仲間には先が見えたとぶちまけた。すると役者揃いの仲間は「そんなに急いでどこに行く」と。

排ガス社会のその奥に、緑の森と風を楽しもう、と励まされた。今想えばその効用を知る仲間がいた。

術後1年は、静かに歩いても呼吸障害。会話をすれば小声で聞こえない。「元気な時の声は出ないのか」と喝ッ！。

ところが2年目に入ると機会ある毎に連れ出してくれた。今日も新芽の空気の中へ。

澄んだやわらかな空気とそよ風、木ずえからこぼれる光。酒も入って大声がこだまする。昨年の今頃とは別人だと褒められた。やはりこの場に吹く風が体内にやさしいのだろうか。今迄健康でいた頃、新緑の空気がこんなに肺にやさしく感じた事はなかった。これをセラピー効果と言うのだろうか。

目に見えずして、数値に表れにくい萌えの風と仲間には励まされた2年が経過。痛みなし、投薬なしでの3ヶ月毎の検診に医師もびっくり…。

支えてくれた仲間も「お化け」と言いたい放題。でも、心やさしく、暖かい。

やがて来るであろう招待状(再発)は先送り出来るぞう。

新緑と芽吹きは、酸素ボンベにも勝る萌えの風の1日だった。
(古屋 勝利)

施設案内

手打ちそば・青目しるこ

青目立不動尊休み処

むかし道を歩いて奥多摩湖が一望できる場所に4月29日にオープンした休み処です。旧家をリニューアールし、食事をしながら眺望を楽しめます。

手打ちそば：600円 しるこ：400円

得盛りそば3人前：1,600円

刺身蕎麦：300円 やきもち：300円

ビール(中)：550円 他に飲み物各種

営業時間 9時から17時(年中無休)

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、初夏から秋に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 8月4日(火) 丹三郎からレンゲショウマ
応募締切日 7月18日(登山)
- ② 8月17日(月) 夏休み子ビッコ探検隊
昆虫とカジカ探し(親子参加)
応募締切日 8月3日(ハイキング)
- ③ 8月18日(火) 夏休み子ビッコ探検隊
昆虫とカジカ探し(親子参加)
応募締切日 8月3日(ハイキング)
- ④ 8月28日(金) 倉沢谷の檜と滝を楽しむ
応募締切日 8月15日(ハイキング)
- ⑤ 9月9日(水) 越沢溪谷の巨樹を訪ねる
応募締切日 8月20日(登山)
- ⑥ 9月24日(木) 白丸叡策と川合玉堂の足跡
応募締切日 9月10日(ハイキング)

募集人員：各回30名、参加費：500円

次号は、平成21年10月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会